

加賀・梯川水系の歴史

金沢工業大学 正会員 中川 武夫

A History of the Kakehashi River Water System in Kaga

by
T. NAKAGAWA

A history of the Kakehashi river water system in Komatsu Ishikawa Japan has been reviewed. It is found that the ecological system has changed dramatically after the completion of the short-cut construction between Shimomaki and Tsurugashima in 1923: The Kakehashi river was in perfect harmony with all the creatures including human beings before the construction, but the favourable interaction was restricted after the construction to some extent. The degree of the restriction had increased with the subsequent constructions for the channel arrangement and embankment completed in 1936 and 1943 respectively.

The present review has clearly revealed that the ecological system is still well preserved and attractive. It is particularly desirable that the future ecological system of the Kakehashi river as well as the new countermeasure against the flood are developed on the basis of the global view in order to preserve the ample nature and excellent culture in Kamotsu.

[Keywords: Edo-Showa era, River water system, Ecology]

1. はじめに

図1に梯川水系の現況概要図を示した。梯川は石川県小松市の鈴ヶ岳(標高1074m)に発し、山間を北上し、右から西俣川、郷谷川、湊上川を合わせ中海付近で平野部へ出る。平野部へ出てからの梯川は左方へ曲流しつつ、右から弘大寺川、鍋谷川、八丁川を合わせたのち左に小松城址(芦城公園)右に小松天満宮を見ながら小松市街地北部を西方に流れる。さらに、梯川は左から木場潟に発する前川を合わせ、弁慶・義経・富樫の勳進帳で有名な安宅の関址を左に見ながら日本海に注ぐ流域面積271.2km²、流路延長42kmの一級河川である。また、梯川は鍋谷川との合流点から河口までの平均河床勾配が3500分の1程度の典型的な緩流河川である。つぎに堤地内の状況であるが、ここには上掲したような日本の代表的な名所、旧跡、文化財が散在しているのみならず鎮守の森、埋蔵文化財包蔵地等も多数分布している歴史的な地域である。なお、埋蔵文化財は梯川と鍋谷川の川筋に集中的に分布している。

本論文の主な目的は梯川水系およびそこを流れる水と人間との係りの歴史的変遷過程を明らかにすることである。

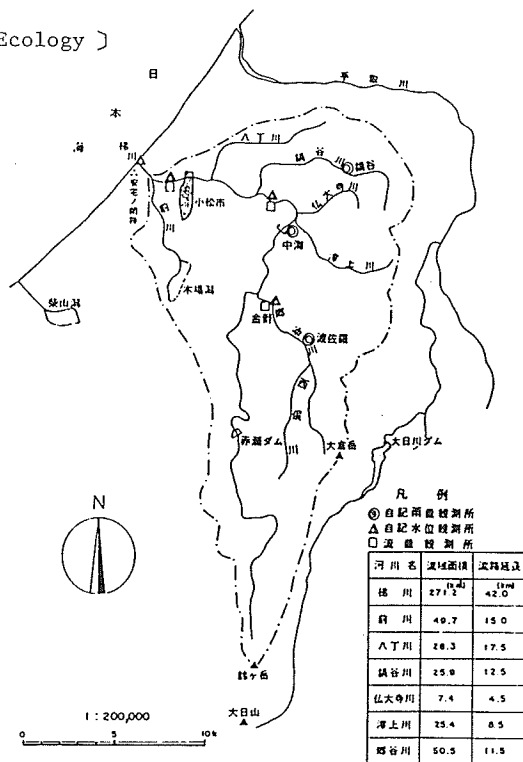


図1 梯川水系の現況概要図
(建設省金沢工事事務所、「一級河川梯川の現況と直轄改修計画の概要」1984(昭和59)年より抜す)

2. 梯川水系の歴史的変遷

古来、柴山潟、今江潟および木場潟を総称したいわゆる加賀三湖は図2に示した1851（嘉永四）年の「小松殿中写之」からも明かなように梯川流域に属していた。これらの三湖はいずれも古墳時代の砂丘移動によって従来入江あるいは湾であったところが外海から切り離されることによって湖沼化したものであって周辺の地勢は極めて平坦な低温地帯となっている。このように梯川と加賀三湖の水は続いていたので、梯川流域に降った雨によって梯川本川の水位が上昇した場合にはこれが加賀三湖へ逆流し、周辺の耕地に甚大な被害をおよぼしていたものと推測される。

1851（嘉永四）年当時の梯川の流路は現在のそれとは異なり、上牧付近で90度程度左へ折れたのち向本折付近でさらに大きく右へ折れ安宅を経て日本海に注いでいた。梯川本川と加賀三湖との係りが密接であったことはすでにのべたとおりであるが、梯川本川と支川との関係も現在とは異なっていた。第一番目の相違点は宮竹と山田付近から導びかれた手取川の水が梯川右岸長ノ田付近において合流し平面を経て梯川に合流していたことである。手取川から梯川への水の供給はいわゆる浮き城としての小松城の戦略的特徴を渇水期においても維持するうえで重要な意味を有していたものと考えられる⁵⁾。第二番目には梯川本川に軽海と向本折との間を結ぶ迂回路^{ついで}があったことである。御茶用水と呼ばれるこの迂回路の水が小松城の外堀へ流れ込み外敵に与する盾の役割を果たしていたことは明らかである。第三番目には上牧付近において右から梯川へ流入する流路があったことである。この流路は小松天満宮を取り囲むように流れていた^{おてふ}ので、当時の小松天満宮は水の中に浮ぶうつそうたる森の中にあつたこととなる。

図2は1867（慶応三）年に描かれた「能美郡梯川筋分間絵図」の一部を示した。この図は現在の古府町、千代田町そして佐々木町に囲まれた地域における梯川の流路がこの当時どのような状況であったかを示している。すなわち、当時の梯川の流路は低温平野を縦横無尽に蛇行する極めて屈曲の激しいものであったことがわかる。梯川の流路が現在のように固定化されたのは明治末期以後に実施された改修工事による。人為的な梯川の流路変更のうちで最大のものは1911（明治四十四）年十一月に着手した改修工事である。この工事の内容は屈曲の著しい下牧と鶴ヶ島の間を開削し、延長4kmの河道区間を1.1kmに短縮し安宅河口に向けて河道の直線化をはかったもので1923（大正十二）年に竣工している。なお、梯川の流路が本工事直前に上牧付近から向本折に向っていたことは1902（明治三十五）年に実測された「梯川平面図」によっても確認することができる。続いて、安宅河口から白江大橋に至る間の河道整備、堤防補強等のために1930（昭和五）年から工事を開始し、1936（昭和十一）年にこれを完了した。さらに1937（昭和十二）年には白江大橋から上流側の約6.5kmにわたる河道区間を下流と同様に改修するための工事がはじまり、1943（昭和十八）年にこれを完成した。この改修によって梯川下流部の大部分の流路は固定されたことになり、現在にいたっている。

3. 梯川水系の地名と手取川の流路変遷

図2に記載されている地名は梯川水系の古い地理、地形を知るうえで示唆に富んでいる。まず、現在の梯川右岸と鍋谷川との合流点付近に古浜、その対岸に白江、ここより上流部に軽海といった海にちなむ地名を認めることができる。このことは過去の一時期に海岸線が軽海付近まで後退していたことを示唆している。この仮説は軽海より上流に江指、上り江が、また白江より南に沖、今江、矢崎、封津、下粟津、粟津、津波倉、戸津、月津、湖津といった地名の存在によっても支持されよう。また、梯川右岸堤内地の牛嶋、福嶋、大嶋、小嶋、鶴ヶ島、一方梯川左岸堤内地の不動嶋、嶋、中嶋といった地名はこれらの地域が過去において海中に没していた頃の位置に対応しているものと考えられる。

蔵は手取川扇状地に散在する窪地は手取川の流水によって刻み込まれた旧河道内に対応しており、一方地名に島のつく台地は互いに隣り合う旧河道に狭まれた旧堤内地に対応しているとして手取川流路変遷の謎を解き明かそうと試みているが、これらの台地もまた梯川堤内地に散在する島のつく地域と同様にかつては本島の島であったと考えた方がより自然であるものと考えられる。

4. 結びにかえて

人類初の月面着陸（1969）、スペースシャトルによる宇宙航行に代表される本格的な宇宙時代を迎えて人類ははじめて自らが生息している地球を宇宙から客観視することができるようになった。多くの人間はこれらの飛翔体から撮影された写真の中の美しい小さな青色の球状体すなわち地球の姿を見て深い感動を覚えた。この劇的な体験を境にして人類は²⁾大宇宙の中にあって地球上のみに存在するものと考えられている生物の有する生命の神秘、有限性、はかなさ、あるいは宇宙と比べた時の地球の小ささと弱さといった自然および人文社会科学全体にまたがる数々の根源的な問と対峙することを余儀なくされた。換言すれば、宇宙時代の到来によってはじめて人類は地球上における自己中心的立場から地球に生息する他の生物との運命共同体意識に目ざめることができたわけである。自然環境の保護、環境問題の国際化といった過去十数年来の激しい潮流が宇宙時代の到来という歴史的な事象によって加速されたことは間違いないところである。

梯川水系の歴史をふりかえることによってわれわれの祖先がこの中を流れる川および水辺に生息する生物とどのように接してきたかの概略を知ることができる。すなわち、梯川の流路および周辺環境は1923（大正十二）年に竣工した改修工事を境に激変した。この改修工事以前の梯川は人間のみならずあらゆる生物と融和一体化した様相を呈していたのに対し、これ以後の梯川は人間を含む他の多くの生物と別の道を歩んできたのである。しかしながら幸いにも、梯川はわが国の多くの河川の中にあって未だ比較的良好な水際環境を保っている数少ない美しい川の一つである。³⁾このような梯川の水際環境をその周辺に住む住民の現実的要求である治水対策と調和を保ちつついかに保存し、昇華していくかという問題に対する知見が生物と環境との調和という人類にとって緊急かつ重要な問題解決のための糸口を与えるものであることは疑う余地のないところである。若者はこうした大局的見地に立って梯川水系の治水対策の企画、立案がなされ、豊かな自然とわれわれの祖先が築きあげてきた秀れた小松の文化とが見事に融合・調和した梯川の水際環境が構築されること希求している。

参考文献

- 1) 一級河川・梯川の現況と直轄改修計画の概要、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所、昭和五十九年四月。
- 2) 北畠直順、「小松天満宮誌」、小松天満宮、昭和五十七年十二月。
- 3) 中川武夫、小松・梯川の水際環境の現状と将来への提言、第13回環境問題シンポジウム講演論文集、土木学会環境問題小委員会、104-109、昭和六十年八月。
- 4) 小松天満宮等専門調査会編「加賀・小松天満宮と梯川」、小松市教育委員会（近刊予定）、中川武夫執筆担当部分。
- 5) 手取川、七ヶ用水の春14 天保開削の二ヶ月用水隧道、北国新聞、3、昭和六十一年四月二十二日。
- 6) 梯川平面図（縮尺6千分の1）、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所所蔵、明治三十五年。
- 7) 蔵国晴、「手取川の歴史」、川北村史 資料二、北国書籍、昭和四十七年。
- 8) 中川武夫、加賀・手取川の流路変遷考、第2回目日本土木史研究発表会論文集、土木学会日本土木史研究委員会、124-129、昭和五十七年六月。
- 9) Hans Mark, The impact of our enterprise in space Technolgg in Society, 1, 43-53、1979。

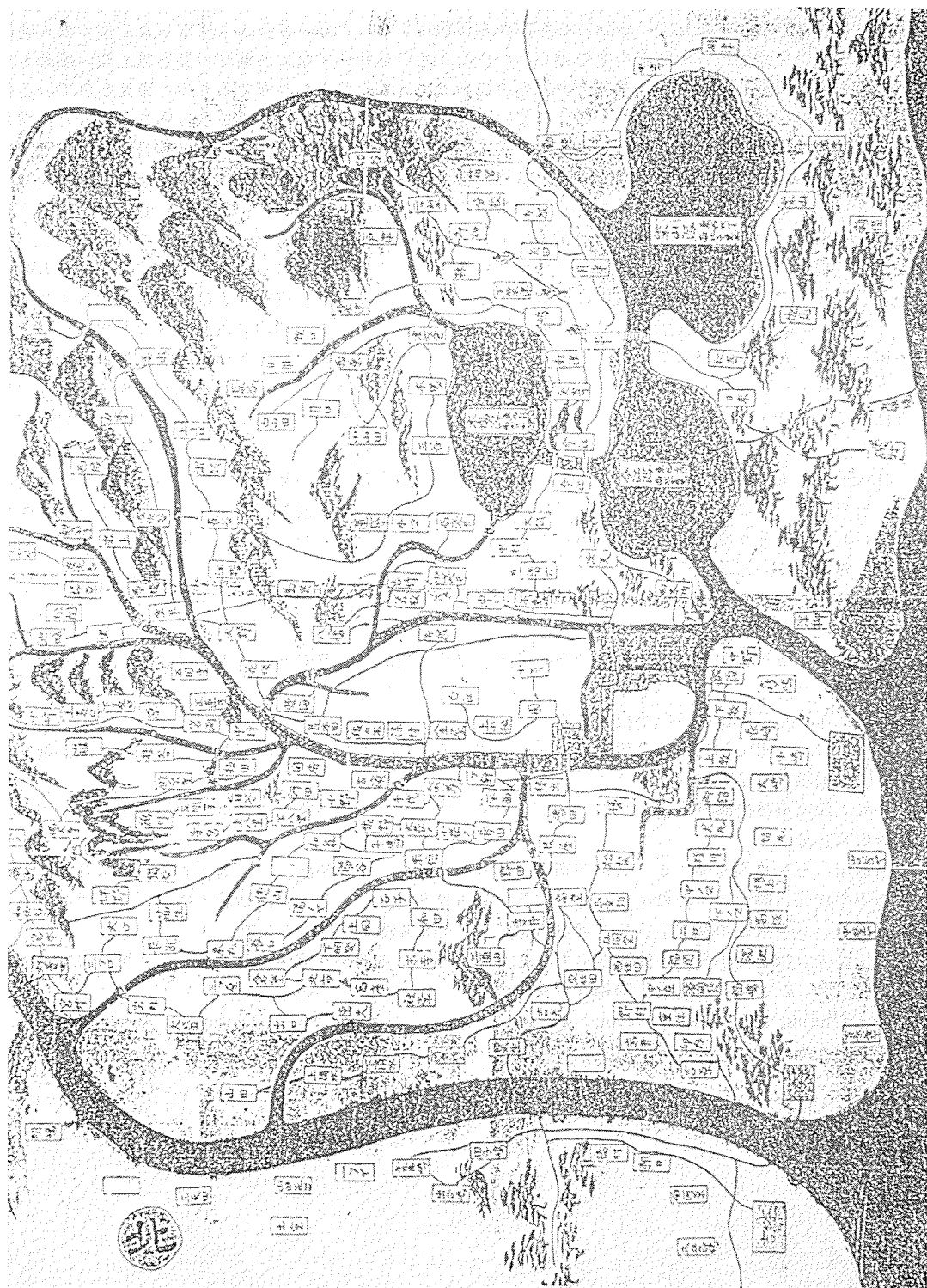


図 2 小松殿中写之
(1851 年 (嘉永四) 年の一部、小松市立図書館所蔵)



図3 能美郡梯川筋分間絵図
(1867 (慶応三) 年の一部、小松市立図書館所蔵)